

## 淨土教理史上に於ける

### 五部九卷の地位及びその概説

石橋誠道

善導大師が支那淨土教の大成者として、また我國の淨土各宗の淵源として、最も重要な地位にあることは今更喋々する必要もないが、然しながら、大師の思想系統は如何に流れ來つたか、またその教理が如何に發展し來つたかといふことを考察することも、決して無益のことはあるまい。

宗祖大師も選擇集に述べられた如く支那には淨土教の大きな流が三流ある。即ち廬山の慧遠流と道綽善導流と慈愍三藏流である。この中慈愍は善導の入寂の年に生れた人で、善導との關係は極めて少いから今は暫く省略するが廬山の慧遠の事に就ては是非とも述べておきたいと思ふ。さてこの慧遠と善導との淨土教の思想にはその教義にやゝ異りがある。それは慧遠と善導とはその相承に少し違があるからだ。今まづ慧遠から述べる事とする。

#### 一 道安等の往生思想

慧遠の淨土教の思想は、その師の道安其他の淨土願生者から流れ來つたことを考へねばなるまい。然らばその道安等はまた誰れからその思想を承けたかといへばそれは甚だ明了でないが、余は恐くは斯ふであらふと思ふ。そもく淨土教が經典として支那に傳つたのはかなり早い時代であつた。即ち無量壽經の最初の譯者と傳へらるゝ安世高は、後漢の桓帝の建和元年(西紀一四七)に安息國から支那に來た人である。(異説があるが今は歴代三寶記に依る)又此經の第二の譯者

と稱せらるゝ支婁迦讖も安世高と殆んど同時に支那に來た人である。此等の人々は印度の龍樹よりも約五十年前に無量壽經を支那に傳へてゐる。勿論龍樹の出世年代にも種々の異説があるが、僧肇の百論の序、摩訶摩耶經下、羅什の龍樹傳等の説に依れば、佛滅七百年(西紀二一五)頃と考へるのが妥當であると思ふからその約五十年前に傳へられてあると言はねばならぬ。

ところが梁の僧祐の著、出三藏記には世高も支讖も無量壽經を譯した事が記されてない。それ故に此兩人は果して譯したか否かといふ疑を懐く人もあるが、(歴代三寶記には支讖が無量清淨平等覺經を譯した事は吳錄に記されてあること云ひ、またこの平等覺經は現存して淨土宗全書第一卷に收められてあるから疑ふ餘地はあるまいが)、魏の文帝の黃初元年(西紀二二〇)の頃支那に來つた吳の支謙が阿彌陀經を(大阿彌陀經即ち無量壽經の異譯)譯した事はこの記録にも載せられてあるのみならず、現に淨全の第一に收められてあるから決して疑ふ餘地がない。而してその後幾度も譯せられて趙宋の法賢に至るまでに、凡そ十二代の譯があり、五存七欠であるといふことは誰れしも知つてゐる事である。又觀經にも三代の譯があり、阿彌陀經にも三代の譯のあることもまたみな知られたことである。

今無量壽經十二代の譯に就て考へて見るに、東晋の太興四年(西紀三二二)即ち釋僧顯の頃までには既に六回の翻譯があつた。けれどもそれが實際に宗教として實行さるゝやうになつたのは釋僧顯の頃からである。(記録の上から考へて)僧顯は道安の師の佛圖澄と同時代の西方願生者で其略傳は梁の高僧傳に載せられてあるが、東晋の太興四年の頃西晋の劉曜が洛陽を攻めたので渡澤(今の山西省の南の境)に隱棲して淨土の業を修した人である。僧顯の入寂の年代は明かでないが、太興四年から約二十七年の後に、道安もまた石氏の亂を避くる爲にこの渡澤に隱遁した。斯ふした關係は自然に道安の往生思想を養成したのであらふと思ふ。

又道安は熱心に般若經を研究したが、それが自然に往生の思想を誘發したであらふと思ふ。道安には種々の著述があ

るがその著述の上から見ても、またその傳記の記事から見ても師は最も般若經に私淑したやうである。夫故に師は自ら斯ふいふてゐる。『昔し漢陰（襄陽）にあるこゝ十有五年、毎年二回づ、放光般若の講義をした。その後京師に来てから四年になるがまた毎歲二遍づ、それを講釋してゐる』と。（出三藏記八、同十五、高僧傳五）又道安の著述の中に、般若析疑略二卷、光讚析中解、光讚析解、般若析准等があるこゝから考へても、非常に般若を研究し般若の思想に私淑したこゝが明かである。所がその般若經の中には般若を修行をする者は、他方の諸佛の淨土に生れて諸佛に見ゆるこゝが出来て種々の功德を得る有様がまゝこゝに委しく明されてある。今其一二の例を示せば

菩薩摩訶薩、般若波羅密を行ふ者は、六神通を得て、欲界色界無色界に生ぜず、一佛國より一佛國に至り、諸佛に禮事す。復た菩薩あり、六神通を得て、諸佛の刹に遊ぶ、その至りし處には聲聞緣覺の教も名もあるこゝなし。復た菩薩あり、六神通をもつて諸佛の國に到るに、その壽は量りなし、命終の後、その國に往生す。乃至この三萬の比丘はこの壽の終に於て、阿閼佛國に生ずべし、其後六十二劫にして、みな佛となるべし。復た六萬の欲天子は、みな彌勒佛の前に生ずべし、（放光般若卷二）

又云、舍利弗、佛に曰して言く、菩薩摩訶薩、般若波羅密に應ずる者は、何れの所より來つて是の間に生れ、この間より去つて復た何れの所に生る、や、佛、舍利弗に告て言く、菩薩、般若波羅密に相應する者は、兜率天上より來つて是の間に生れ、或は他方の佛國より來つてこの間に生れ、或は人道中より來つてこの間に生る。兜率天上より來る者は終に般若波羅密を失はず、諸陀隣尼諸三昧門、諸衆智門悉く皆な前に在り、他方佛國より來る者は、便ち疾く般若波羅密を成ず、智慧の中に於て日日增益し、諸の深法要みな現じて前にあり、却後乃ち般若波羅密を成じ、生ずる所に常に諸佛を見て諸佛を離れず、人道より來る者は、この菩薩未だ阿惟越致に及ばざる者は、諸根暗鈍にして、疾く般若波羅密を得るこゝ能はず、便ち陀隣尼門を見るこゝ能はず。

舍利弗よ、汝が問ひし所の如き、菩薩、般若波羅密を習行する者は、是の間の終に於て、當に何れの所に生るべきや  
まは、この菩薩は他方の佛國に生ずべし、一佛國より復た一佛國に生じて、常に諸佛を見奉り、諸佛世尊を離れず。  
乃至、復た一生補處の菩薩あり、般若波羅密を行じ、四禪を具へ、四等意、四無形定、三十七品、空、無相、無願を  
具へ、常に諸佛を見奉り、世尊に供事し、清淨の行を持ち、便ち兜率天に生じ、其天上に於て、其壽命に隨つて、諸  
根具足し、無央數の諸天人眷屬の爲に圍繞せられて、爲に法を説き、復た世間人中に來生して、阿惟三佛を作る。(放  
光般若經第二)

此等の文から考へて道安の往生思想は恐くは此の般若經から誘導されたものであらふ。

ところが道安は西方願生者ではなくて兜率願生者であつたやうだ。そのこゝは梁高僧傳五卷、道安の傳の下に『道安  
は毎に弟子の法遇等と與に彌勒の前に於て誓を立て兜率に生ぜんことを願ふた』といふ文があり、又同傳五卷に記す道  
安の弟子の曇戒の傳に、『曇戒疾重けれども、常に彌勒佛の名を誦す、弟子智生、疾に侍して問ふて曰く、何んぞ安養  
に生ずることを願はざるやと、曇戒答て曰く、われ和上(道安)等八人と與に、兜率に生ぜんことを願へり、和上及び  
道願等は皆な已に往生せり、吾は未だ往くことを得ず、この故に願生するのみ』といふ文があるから道安は兜率往生を  
願つたものであらふ。その放光般若第二、光讚般若第二等には兜率往生に關する數多の經文があるから恐くは其等の影  
響であらふ。けれどもこゝに疑問であるのは、若し道安が僧顯の思想を承けたとすれば、僧顯は西方願生者であるのに  
何故に道安が兜率を願ふたかといふ問題であるが然し道安の時代は支那に於ける往生思想の發生時代で兜率にせよ西方  
にせよ兎も角他方の諸佛の淨土に往生せんことを思ふ思想が、漸く盛んにならんことを思ふ時代で後世の如く兜率と西方との勝劣  
を論ずるほど發達してゐなかつたものと考へる。だから兜率西方等を總じて一の往生思想と見てよからふと思ふ。

さて道安は兜率願生者であつたがまた一面には西方願生者が可成にあつたやうだ。即ち僧顯の事は前に述べた通りで

ある。又道安よりもやゝ先輩である支遁（道林）の阿彌陀佛像讚並に序には、佛戒を持ち阿彌陀經を讀誦して往生を願ふ者のあることが記されてある。（廣弘明集第十五卷）この阿彌陀經といふのは勿論無量壽經であるから當時無量壽經を讀誦した證據にもなり、又阿彌陀佛像讚のあることから當時阿彌陀佛の像の作られてあつたことも解かる。又道宣の三寶感通錄に依れば、東晋の孝武三年に襄陽の檀溪寺の道安が郭西の精舎に丈六の金銅の無量壽佛を鑄造しその翌年に莊嚴を成就した、よつてその檀溪寺を金像寺と改名したと記されてある。又前にも述べた如く曇戒の弟子の智生が何故に安養に生ずることを願はざるやと質問したこゝなき、此等はみな支那に於ける阿彌陀佛信仰の最初の文献ともいふべきものであるが、なほ文献に顯はれない西方願生の人々が随分あつたであらふと思ふ。斯ふした譯で兎も角、道安の頃は西方にせよ兜率にせよ淨土往生の思想が支那に發生して發展せんとした時代であつたことは事實である。

## 二 廬山慧遠の淨土教

廬山の慧遠が西方願生者であつたことは明白な事實である。慧遠もその師の道安の如く般若經に私淑したやうである師は始め道安から般若經の講義を聞いて豁然として大悟したといふ點やまた慧遠には凡そ十四部三十五卷の著書があるが、その中大智度論序一卷、大智度論要略二十卷（一名大智度論抄）等のある點から考へて般若を深く研究した事は明かである。特に慧遠の晩年には、羅什三藏が支那に來て多くの龍樹の著述を翻譯したから般若思想の研究には一層の便宜を得た。

所が慧遠の西方願生の思想には凡そ二の系統があり、その外羅什の思想の影響もあると思ふ。即ち一は慧遠已前の西方往生の思想であり他は般舟三昧經等の思想である。般舟三昧經は始め後漢の支婁迦讖が翻譯し、次で西晋の竺法護が譯した事が出三藏記二卷に記されてあるが、大正大藏には支婁迦讖の譯本が二種と失譯の拔跋菩薩經（般舟三昧經の初

譯)こが收められてある。慧遠は大に此經を愛誦しそれに依つて西方往生を願はれたやうに思ふ。其譯は慧遠が特に戒律を重じた點、靜寂な處を愛した點、及び三昧の念佛を修行した點等が全く般舟三昧經の思想と一致してゐる。又慧遠が羅什に對つて大乘の深義十八種を尋問し羅什がそれに答へた問答が、大乘大義章三卷になつてあるが(大正大藏四十五)その中卷に、問念佛三昧並に答といふ一問答がある。この問答には般舟三昧經の念佛の事に就て色々論ぜられてあるこれは即ち慧遠が、常にこの經を讀誦して懐いた所の疑問を羅什に尋ねたのであらふ。これ等の點から考へて慧遠は恐くはこの經を以つて西方願生の基準としたものと考へる。

勿論當時、無量壽經は幾度も翻譯されてあつたから慧遠もそれを讀誦したに違ひない。けれども慧遠は恐くはこの經よりも寧ろ般舟三昧經を重じたやうである。それには種々の原因があるであらふ。即ち無量壽經には阿彌陀佛の因願及び成就は委しく明されてあるが往生の行因が略されてある。所が般舟三昧經には往生の行因なる念佛三昧が委しく明されてある點、又慧遠の頃に未だ世親の往生論が譯せられなかつたこと、又暹良耶舍の觀無量壽經が譯せられなかつたこと、又その當時持戒持律の思想が高調せられてそれが般舟三昧經の思想と符合した點等がその原因をなしたのであらふ。兎も角慧遠の淨土教は觀經に依つた淨土教でなくて、般舟三昧經に依つたといふことが、曇鸞の淨土教と幾分の相違を生ずる主なる原因であると思ふ。

淨土の三經が重く視らるゝやうになつたのは恐くは曇鸞大師からである。即ち世親の無量壽經論願生偈(往生論)が支那に譯せられてからである。この論が魏の菩提流支に依つて一たび翻譯せらるゝや曇鸞はそれに依つて論註を作り淨影嘉祥は何れも大經の義疏を著し、又觀經は曇鸞が菩薩流支に授かつたのを始として、淨影、嘉祥が其疏を作り道綽も又安樂集を著はして觀經の深義を布衍した。又阿彌陀經も羅什が譯した後天台が其疏を著はした。斯ふした譯で三經の研究は曇鸞已後漸く盛んになつたのだから、曇鸞よりも先にあつた慧遠の頃に無量壽經が餘りに重く視られなかつたの

も無理のないことだ。それ故に廬山の慧遠が無量壽經よりも寧ろ般舟三昧經を重要視した事は當然である。されば今この下に般舟三昧經の念佛に關する文の一二を抄出して讀者の參考に供したいと思ふ。般舟三昧經卷上に曰く（大正藏第十三）

佛の言く、今現在の佛、悉く前に在て立つ三昧あり、それこの三昧を行ふ者、若くは問ふ所の者は、悉く之を得べし  
馱陀和菩薩、佛に白して言く、願くは佛哀んで之を説き給へ、今佛説き給へば、過度する所多し、安隱する所多し、  
願くは佛、諸の菩薩の爲に大明を現ぜよ。佛、馱陀和菩薩に告げ給はく、一の法行を常に習持すべし、常に守るべし  
復た餘の法に隨はざれ、諸の功德の中、最尊第一なり、何等をか第一の法行となすか、この三昧を現在佛悉く前に在て立つ、  
味ミ名く、乃至、佛の言はく、この行法を持つが故に、三昧を致して便ち三昧を得、現在の諸佛悉く前に在て立つ、  
何に因て現在の諸佛悉く前に在て立つ三昧を致すや、馱陀和よ、それ比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、あつて、戒を  
持つこゝ完具し、獨り一處に止り、心に西方の阿彌陀佛を念ぜよ、今現に聞く所に隨つて念ぜよ、この國より千億萬  
の佛刹を去つて、その國を須摩提ミ名く、その國の衆の菩薩の中央に阿彌陀佛在つて經を説く、一切の時に常に阿彌  
陀佛を念ぜよ、馱陀和よ、若し沙門白衣にして西方阿彌陀佛の事を聞く者は、當に彼の佛を念すべし、戒を缺こゝ  
を得ず、一心に念するこゝ若は一晝夜、若は七日七夜せよ、七日を過ぎて後、阿彌陀佛を見るべし、覺に於て見へず  
こゝも、夢中に於て之を見るべし、馱陀和よ。この國土に於て阿彌陀佛のこゝを聞いて、しばし念すれば、この念を  
用ゆるが故に阿彌陀佛を見る。佛を見れば從つて問へ、何等の法に因つて阿彌陀佛の國に生ずべきか、その時阿彌陀  
佛この菩薩に語つて言く、我國に來生せんミ欲すれば、常にしばし我を念ぜよ、常に念じて休息するこゝ莫れ、是  
の如にして我國に來生するこゝを得るミ、佛の給はく此菩薩は、この念佛を以ての故に、阿彌陀佛の國に生ずるこゝ  
を得べし。

般舟三昧經上に又曰く、菩薩是の如く佛の威神力を以て、三昧の中に於て立つ、見んご欲する所の何方の佛なりとも見んご欲すれば即ち見る。何を以の故に是の如くなるや、毘陀和よ、是れ三昧力の成ずる所なり、佛威神を以て三昧中に於て立つごは、三事あり、佛威神力を持て、佛三昧力を持て、本功德力を持て、この三事を用ての故に、佛を見んごを得るご。

已上は般舟三昧經の文を抄出したのであるが、この中初の文は善導の觀念法門にも引用して（觀念法門は異本に依る故に文言やゝ異なる）念佛三昧の經證とされてある。さて此經の大體の思想は諸の欲想を捨て諸法の空理を悟り持戒清淨にして定心を起し、念佛三昧に入つて見佛して、西方淨土に往生せんごすれば佛の威神力三昧力並に行者の本功德力に依つて見佛し遂に往生を得るごいふ思想である。即ち慧遠の念佛は般若皆空の思想を以て基調とし之に持戒禪定等の修行を加へ、念佛三昧に入らんご精進すべき教である。故に慧遠の念佛三昧詩序には下の如くに言はれてある。

念佛三昧ごは何ぞや、思ひ専らにして想寂するの謂なり、思ひ専らなれば志一にして撓まず、想寂すれば氣虛にして神明かなり、氣虛なれば智その照を恬す、神明かなれば幽ごして徹せざるなし、斯の二は乃ち是れ自然の玄符、一に會して用を致す、是の故に閑處に靜思して物に感じ靈に通じ、心を御する唯だ正動にして徹に入る、乃至、又諸の三昧その名甚だ衆し、功高ふして進み易きは念佛を先ごす、玄を窮め寂を極め、尊んで如來を號ぶ。神體合變して差別なきが故に、今この定に入る者は、昧然ごし知を忘る、乃至、自然に玄音の叩くを察して心に聽くごきは、塵累毎に消へて滯情融朗なり、天下の至妙に非ずんば、誰れか能くごに與からんや已上

已上は慧遠の念佛三昧詩序に顯はれた慧遠の念佛の思想の要點である。なほその外に二三の材料はあるけれども結局これ位より外により委しく知るごは出来ない。

所がこの慧遠の念佛は天台の四種三昧の念佛に大に影響があるやうに思ふ。天台大師の傳記を見るに天台大師は二回



までも廬山に登つて慧遠の芳躅を探つたことが記されてある。また師はその臨終の時、侍者を呼んで法華經と無量壽經とを讀ましめ往生を願はれたといふことが記されてある。又摩訶止觀には四種三昧の念佛が説かれてあるがその中の常行三昧といふのは般舟三昧經に原いたものである。故に摩訶止觀には斯ふ言はれてある。

常行三昧とは亦た般舟三昧と名く、梵語には般立といふ、佛立に三義あり、一には佛の威力、二には三昧力、三には行者の本功德力よく定中に於て、十方の佛、其前に在つて立ち給ふを見る、故に佛立といふ、九十日を期さなし、三月を終るまで、身常に施行して、休息することを得ず、口に常に阿彌陀佛を唱し、心に常に阿彌陀佛を想ふ、或は先づ想ひ後に唱へ、或は先に唱へ後に想ふ、想唱相繼いで休息せしむることなかれ、これこの三昧は、極て能く宿障を斷除し、諸の功德に於て、最も第一とす。

またこの般舟三昧經の思想は善導大師にも影響してゐると思ふ。新修傳の第廿五には『般舟行道、禮佛方等を以て己が任まなす』といふ文があり、同新修傳の第廿六には『慧遠法師の勝躅を欣んで、遂に廬山に往て其遺範を見て、乃ち豁然として思を増す』と記されてある。又觀念法門には『般舟經に依て、念佛三昧の法を明す』といふて般舟三昧經の文が諸所に引用されてある。又般舟讚には『般舟三昧樂とは何ぞや、答て曰く、梵語には般舟と名け、此には常行道と名く、或は七日、九十日、身行無間なる總名なり、三業無間なり故に般舟と名く』といふて、頗る天台の常行三昧によく似てゐる。即ち般舟三昧を慧遠は佛立三昧といひ天台は常行三昧といひ善導は常行道三昧と名けたれども其行事は極て相類してゐる。此等の點から考へて慧遠、天台、善導等、思想關係の甚だ深いことが解る。

次に羅什の思想がまた慧遠に多大の影響を與たであらふと思ふ。羅什が長安に來た時には、慧遠は廬山から遙かに長安に書を送つて大に歡迎の意を表した。その後頻繁に交通して教を乞ふたといふことは慧遠の傳記に記されてある。羅什が長安に來たのは姚秦の弘始三年の十二月で、(四〇一)慧遠が廬山に入つてから十七年の後である。それ故に慧遠の

念佛思想はほど確定した後であらふが、然しまた羅什の思想の影響は決して少くはなかつたと思ふ。言ふまでもなく羅什は龍樹の著書を多く翻譯した人で即ち般若三論等の思想を主として傳へた人であるから固より般若の研究者であつた慧遠には全く早天の雨であつたに違ひない。加之、かの大乗大義章の中に般若三昧經の念佛の事に就て問答したことは前に述べた通りであるが、このほか佛の眞法身、眞法身の像類、眞法身の壽量等に就いての問答がある。斯ふした譯でまだこの時代には彌陀の佛身佛土等が明了に論定されてゐなかつたから、大に羅什の指導を受けてそれ等が漸く深刻に論究されたに違ひない。而して慧遠の寂後に於ても慧遠の後繼者はあつたけれども慧遠の時のやうな盛況を見ることは出来なかつた。

### 三 曇鸞大師と往生論

善導流の念佛の先驅者は言ふまでもなく曇鸞大師である。その曇鸞を淨土教に導いたのは菩提流支三藏である。菩提流支が曇鸞に觀經を授けて淨土教に歸せしめたといふことが、善導流の念佛の支那に起つたそもゝの原因である。所がその觀經は誰れの譯した經であつたかといふことを考へて見るに余はそれは恐く晝良耶舎の譯した經であつたと思ふ。何故なれば、凡そ觀經には三種の譯本がある。第一譯は後漢の失譯を傳へらるゝもので、第二譯が晝良耶舎の譯本、第三譯は宋の法秀の譯本である。所が曇鸞の往生論註には凡そ十ヶ所觀經の文が引いてあるが皆な晝良耶舎の譯本の文ばかりである。此本は宋の元嘉元年(四二四)に支那に來た晝良耶舎が譯したもので、元嘉元年は曇鸞が流支から觀經を授かつた梁の大通二年(五二八)よりも約百年前であるから曇鸞の頃既に世に行はれてあつたことを想像することが出来る。又淨影の慧遠、嘉祥の吉藏等は皆な晝良耶舎の譯本に依つて觀經の疏を書いてゐる。又道綽の安樂集、善導の觀經の疏もみなこの耶舎の譯本に依つたもので、他の譯本に依つたものは一つもない。斯ふした事から考へて曇鸞の授かつた

觀經は恐くは晝良舍耶の譯本であらふと推定する。然しながらこれは餘りに獨斷のやうに見へるが若しも曇鸞が他譯の觀經を受けたならば相傳の書として最もそれを重すべく、従つてそれを引用すべき筈であるのに全くそれがなされぬ事から考へて斯様に推測する方が寧ろ妥當であらふと思ふ。又或は觀經の譯本三種の中他の二種は既にその當時に失はれてゐたのかも解らない。

先に羅什三藏は、多く龍樹の著述並に傳記等を傳譯したが今この菩提流支は主として世親の著述を傳譯した。善導流の淨土教として最も重要な地位を占むる世親の往生論もまたその一である。この本は歷代三寶記の説(三卷及び九卷)に依れば北魏の普泰元年(五三二)に譯したと記されており、若し開元釋教錄に依れば北魏の永安二年(五二九)に譯されたと云はれてゐる。所が曇鸞が觀經を授かつたのは(續高僧傳第六に依る)梁の大通二年(五二八)の頃であるから曇鸞が觀經を得てから少し後に譯されたものである。されば曇鸞はかの觀經を得て後に、またこの往生論を得て益々淨土教を研究して遂に往生論註を著はされたに違ひない。

往生論を調べて見るに約十七種の經論が引用されてゐる。その中最も多く引かれてゐるのが康僧鑑の譯した無量壽經でそれが九ヶ所、次に晝良耶舍の譯した觀無量壽經でこれが六ヶ所、次で法華經が四ヶ所、十住毘婆沙論、維摩經各の二ヶ所、その他は皆な一ヶ所であるが、その中羅什の譯した阿彌陀經が一ヶ所である。斯ふして見ても大經と觀經に最も重きを置かれた事が明かであり、特に今日我宗の正依の經典として用ゆる三經が引用されてその他の異譯の三經の名が一つも顯はれてゐないといふことは大に注意すべき事である。これから考へても淨土正依の三經の組織は、源と曇鸞に起因しそれが道綽善導に及び以て今日に至つたこと考へなければなるまい。従つて淨土の經典の諸種の譯本の中でも曇鸞流ではこの譯本が最も重ぜられたことが解る。しかのみならず、道綽善導よりも先輩であるかの淨影の慧遠、嘉祥の吉藏もまた康僧鑑の譯本に依て無量壽經の義疏を書いた。又觀經に就て考へても淨影嘉祥が義疏を書いたのは晝良

耶舎の譯本であつた。又阿彌陀經も天台大師が疏を作つたのは羅什譯の本であつた。

斯様に曇鸞が一たびこの三經を採用して、往生論の註釋をしてから最も權威ある諸の學者が擧つてこれらに依つて淨土教の研究に着手したさいふことは最も注意を要することである。けれども諸師の解釋には大分に誤りが多かつた。後に善導は四帖の疏に於て此等を對破されてある。その中獨り道綽禪師は最も曇鸞の教行を慕ひ、その著安樂集の中に於ても多く論註の文を引き、その義を布衍されてある。

#### 四 曇鸞の著述に就て

此に一言しておきたいのは曇鸞の著述の事である。曇鸞の著書は諸傳の中みなその名が違つてゐる。迦才の淨土論に依るに、曇鸞は天親菩薩の往生論を注解して、裁して兩卷をなし、又無量壽經の奉讚、七言の偈百九十五行、並に問答一卷を撰集して世に流行すゝ記されてある。續高僧傳には、曇鸞は禮淨土十二偈を撰して龍樹の偈の後に續く、又安樂集兩卷を撰す、廣く世に流るゝいつてある。

この中迦才の往生論の注解と續高僧傳の安樂集とは同本異名である。即ち今の往生論註はそれである。迦才の問答一卷さいふのは現今世に行はるゝ略論安樂淨土義である。この書は享保年間、叡山の靈空が後世の僞作であるを言ひ出して一時は非常に喧しい問題となつたが、近來矢吹氏の集められた燉煌寫經の寫眞の中にも現存するのでその問題は自ら解決を見る譯である。

次に迦才の淨土論に謂ゆる無量壽經奉讚さいふのは、安樂集にも大經讚若くは大經奉讚として引用されてあるが、現今淨土宗全集の一卷に收められてある讚阿彌陀佛偈と同一である。その譯はこの讚阿彌陀佛偈を檢するに前後の二篇から成立し、七言偈百九十五行から出來てゐる。迦才の淨土論にいふ所の無量壽經奉讚と全く行數が同一であり、又安樂

集に奉讚の文が引用してあるが、其文が讚阿彌陀佛偈の文と全く同一だから同文異名である事が明かである。又續高僧傳の禮淨土十二偈といふのは恐くはこの讚阿彌陀佛偈の事であらふ。其譯はこの讚阿彌陀偈は前後の二篇から成り、その前編は十四節から成立してゐるがこの前編は十二光佛を讚嘆した偈文である。それ故に禮淨土十二偈といふは恐くは禮淨土十二光佛偈の略稱であらふ。又續高僧傳に龍樹の偈といふは、善導が六時禮讚に願往生禮讚偈として中夜禮讚に引用した十二節の偈であらふ。斯ふした譯でこの兩傳に記されてある曇鸞の著述が何れも存在してゐることは我宗として最も喜ぶべきことである。曇鸞が龍樹並に世親に準じて斯様に西方淨土の讚歌を作つて、願生の儀式を行はれたことは定に後の善導をして禮生禮讚の讚文を大成せしむる原由をなしたものと考へる。これまた淨土教徒として最も悦ばしい事である。

## 五 道綽禪師と安樂集

道綽禪師の安樂集は淨土往生要義要文集とも云ふべきものである。續高僧傳の道綽の傳に『道綽、淨土論二卷を著す、遠くは龍樹天親を談じ、近くは曇鸞慧遠に及ぶ、淨土を尊崇して明かに昌言を示す』と言はれてゐるのはその意である。三經の中では觀經を中心としたものであらふ。その事は一寸見たばかりでは解らないが諸の經論を引用する中、特に觀經の文を引く時にはいつも此觀經といふて特に此といふ字が添へられてゐる事や、また安樂集の上卷に今此觀經は觀佛三昧を以て宗となす。若し所觀を論ずれば依正二報に過ぎずと言はれてゐることから考へて、觀經を中心とした書であることが解ると思ふ。道綽が三經の中特に觀經を中心とされたのは何故であるかと言へば、曇鸞の淨土歸入は觀經の授受に始まり、又觀經は淨土往生の實行の方面が委しく説かれてゐるからであらふ。又道綽の傳を（續高僧傳第二十卷）見るに、無量壽觀經を講ずること殆ん二百遍であつたと言書いてある。道綽が斯様に深く觀經を研究された結果

その結晶としてこの安樂集が出来たのである。

けれども此集の著述の體裁は決して文々句々の説明ではなくて、淨土教に關するすべての經論の研究の結果、並にその頃喧しかつた淨土教に關する重要な問題及びその解決の要義を集めたものである。それ故に若し經論の種類からいへば、六十餘種の經論を引いて辨難會通して西方淨土往生を勧め淨土教の眞意を發揮せんむ努められてある。

今その中主要な問題を述べれば、信行禪師の喧しく言はれた末世思想から來る時機の問題、觀經に就て淨影の觀佛爲宗或は嘉祥の因果爲宗說に對する觀佛念佛爲宗の問題、大經及び觀經の疏に於て淨影等が主張する化身化土に對する報身報土の說、無相大乘家に對する有相無相の論、攝論家に對する會通別時意の論、及び兜率西方の勝劣等を論明し、古來の高僧、淨教歸入の事實、諸經に多く念佛を勧むる事、念佛の種々の利益等諸種の事項を論證して淨土往生を策勵されたものである。

惟ふに當時は陳隋の後を受けて、佛教の研究が漸く盛んであつた爲に諸種の教義幾多の問題が遺憾なく討議され、特に淨土教は曇鸞に依つて一たび烽火を擧げられたが、その後淨影、嘉祥等の他宗の英傑が大經觀經等の疏を作り又攝論家等の説も出て、曇鸞の淨土教に對しては頗る不利の點が多かつたので、道綽は大に之を慨きそれ等の障礙を排除して曇鸞の眞意を發揮せんむ努められた結晶が即ちこの安樂集二卷である。

こゝに一言述べておきたいと思ふのは曇鸞道綽の淨土思想の系統である。續高僧傳に依るに、曇鸞は廣く内外の經典を研究したが特に四論及び涅槃經の佛性義を深く研究されたこと記されてある。であるから當時最も盛んであつた四論宗の系統に屬する人であらふ。若し然れば曇鸞は、龍樹の思想をその中心としたものであり、従つてまた龍樹の十住毘婆沙論などにも私淑されたこと、思ふ。即ち曇鸞は龍樹世親の思想を承けて廬山流とは別に新しい淨土教義を創唱し道綽善導流の基礎をなしたものである。だから曇鸞の諸傳の中にいづれも龍樹に關する説話が記されてあるが、廬山の慧

遠に關する何等の記事をも見出さない。また地理上から考へても廬山と并州とは南北遙かに隔たり、特に昔時の不便の際で國は南北兩朝に分れてゐた時だから殆んど交渉がなかつたであらふ。

所が道綽善導になるこゝ、その趣を異にする。道綽は固より曇鸞の後繼者で、その教義は曇鸞に異るべき筈はないが恰も隋末初唐の際で國は南北統一せられ交通は最も便利であり諸宗は續々勃興し、高僧續出して高尚な議論を戦はすこいふ時であるから曇鸞よりも餘程思想が複雑になつてゐるたに違ひない。即ち曇鸞の時には未だ起らなかつた淨影、嘉祥天台等の思想が今は一大勢力として影響を與へたに違ひない。されば道綽の時に於てはあらゆる思想が合流して、道綽の念佛思想を構成したものと云はねばならぬ。それ故に、續高僧傳の記者道宣は道綽は淨土論（安樂を指す）二卷を著はす、遠くは龍樹天親を談じ、近くは曇鸞慧遠に及び稱讚した。善導大師またその後を受けて彌よ出藍の徳を顯はし古今楷定（統正）の義を發揮されたものである。

## 六 善導大師の淨土教

前にも述べた如く、支那の淨土教は釋僧顯已來善導に至るまで殆んど三百年の間に、徐々としてその教義が進展した特に善導の頃は唐の全盛時代で内には制度の改革あり外には四方の征服あり、領土は益々擴大し、西域諸國との交通頻よ頻繁に、諸種の思想並に宗教の傳來あり、又佛教は六朝已來盛んに研究せられた教義が漸く圓熟して諸宗の成立を見るに至り、龍象林の如く對立して蘭菊その美を競ふの時であつた。この時に方つて學解といひ道行といひはた文才といひ巍然として高く雲表に聳へた聖者は獨り善導大師であつた。善導の事蹟はこゝに語る必要があるまい。またその教義を委く述ぶる餘白をもたない。唯だ私としては善導の著書は我が淨土教理史上どんな地位を保つものであるかといふことを述べなくてはならない筈である。

善導の著書の最も重要なものは五部九卷である。この外に彌陀義といふものが百卷あつたを傳へられてあるがそれは現今傳はらない。又念佛鏡二卷、並に臨終正念訣一卷があるが、それは恐くは今の善導の著述ではない。だから今は唯だかの五部九卷のみに就て少し述べて見たいと思ふ。

善導流の人々が觀經を中心とされたことは曇鸞已來一貫してゐる。五部九卷の中、四帖の疏は全く觀經の疏であつて善導が最も心血を注いで淨土教の眞意を發揚し宗義を發表せられた名著である。即ち古來諸宗の高僧學者に依つて誤解せられた諸の教義、論難せられた幾多の問題、并に曇鸞道綽等に依つて未だ解決を見なかつた數多の重要事項、若くは善導當時の諸宗の學者の異見等は此の書に依て全く解決を見たのである。而して善導自らも全く古今を楷定（統正）したといふ自信力のあつた著述で、しかもそれが彌陀の直説と同一の價値を有するものと自信せられた書物である。故に善導自ら此疏の終りの散善義の後序に、その意を明かにして云く、『敬て一切有縁の知識等に白す、余は既に是れ生死の凡夫、智慧淺短なり、然るに佛教幽微なれば、敢てたやすく異解を生ぜじとて、遂に即ち心を標し願を結して靈驗を請求す、まさに心をいたして法界の一切の三寶、釋迦牟尼佛、阿彌陀佛、觀音勢至及び一切の莊嚴相等に南無歸命し奉る。某、（善導）今この觀經の要義を出して、古今を楷定せんを欲す、若し三世の諸佛、釋迦佛、阿彌陀佛等の大悲の願意にかなはば、願くは夢中に於て、上に願ひし所の如き一切の境界の諸相を見ることを得せしめ給へ、佛像の前に於て願を結し已て、日別に阿彌陀經を誦すること三遍、阿彌陀佛を念すること三萬遍して、至心に發願す。即ちその夜に夢みたり、西方の空中の上の如きの諸相の境界、悉く皆な顯現す、雜色の寶山、重百重千し、種々の光明ありて下の地を照して地金色の如し、中に諸佛菩薩あつて或は座し或は默し、或は身手を動かし、或は住して動かざる者あり、既にこの相を見て、合掌立觀すること、や、久ふして乃ち覺む。覺め已て欣喜に勝へず、こゝに義門を條録す、これより已後は、毎夜夢中に常に一僧あつて、來つて玄義科文を指授す、既に了りたれば更にまた見へず、後時に脱本し竟つて



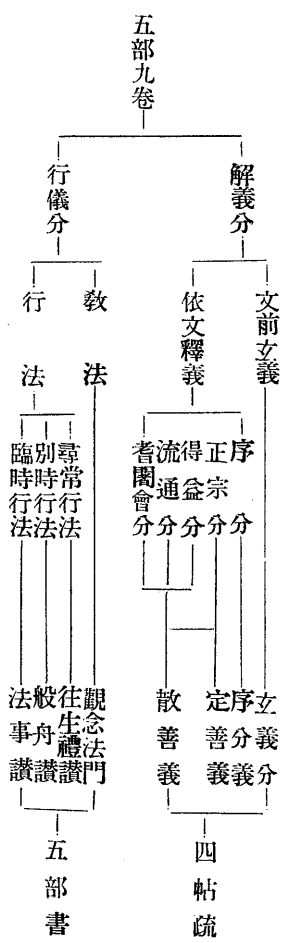
また更に至心に七日を要期して日別に阿彌陀經を誦すること十遍、阿彌陀佛を念すること三萬遍、初夜と後夜には彼の佛の國土の莊嚴等の相を觀想して、誠心に歸命することもつばら上の法の如くせり。その夜即ち夢むらく、三具の磑輪道の邊りに獨り轉ず、忽ち一人の白き駱駝に乗る者あり、來り前んで勸めらるゝに、師、努めて決定して往生すべし、退轉することなかれ、この界は穢惡にして苦み多し、いたく貪樂することなかれと。答て曰く、大に賢者の好心なる視誨を蒙りぬ、某、畢命を期して敢て懈慢の心を生ぜずと。中略上來のあらゆる靈相は本心物の爲にして己身の爲にせず、既にこの相を蒙れり、敢て隱藏せず、謹んで以て義の後に申呈して、聞を末代に被らしむ願くは含靈をして之を聞て信を生じ、有識の視る者をして、西に歸せしめんすと、この功德を以て衆生に回施す、悉く菩提心を發して慈心をもつて相向ひ、佛眼を以て相看て、菩提まで眷屬となり、眞の善知識となつて、同く淨國に歸し共に佛道を成ぜん、この義已に證を請ふて定め竟んぬ、一句一字も加減すべからず、寫さんとする者もつばら經法の如くせよ、』と述べられてある。この言に依るも如何に自信力あり權威ある著書であるかは明かである。故にこの疏は、古今楷定の疏と稱して最も尊重されてある。即ち古來久しい間、支那に行はれた淨土教はこの疏に依つて全く大成されたのであつた。我宗の宗祖法然上人が、印度支那に於ける淨土の列祖の中にも特に善導の一師を選んで淨土一宗を開創し、自ら叫んで偏依善導と仰せられたのもそれが爲である。

## 七 五部九卷の概説

五部九卷を大別して二ミなすこゝが出来来る。即ち解義分と行義分である。解義分とは即ち四帖の疏で觀經一部の文義を委しく解釋したもので、即ち玄義分一卷、序分義一卷、定善義一卷、散善義一卷である。この中玄義分は文前に觀經の幽玄なる旨を説き顯はし、經論の相違、諸師の異説等を解決したものである。序分義、定善義、散善義は、文に依て

義を釋したのでこの中自ら五分となる。一に序分、二に正宗分、三に得益分、四に流通分、五に耆闍會分である。序分は序分義に之を明かし、正宗分は二に分れ、定善の十三觀は定善義に之を明かし、散善の三福九品等は散善義に明されてある。また得益、流通、耆闍會の三もみなこの散善義の中に説かれてある。

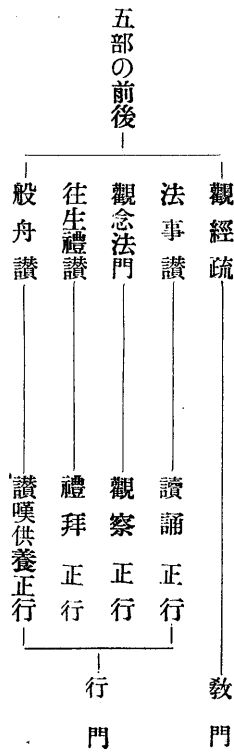
次に行儀分に就て言へば、この中教法と行法との二に分けることが出来る。即ち觀念法門には、觀佛三昧、念佛三昧等の教と行と俱に明されてあるが、他の三部に比して委しく教法が明されてあるから、之を教法とすることが出来る他の三部は主とし行法が明されてあるがその中往生禮讚は尋常行法、般舟讚は別時行法、法事讚は臨時行法と見ることが出来る。今圖を以つて示せば下の如である。



八 五部九卷の前後

まづ解行の次第から四帖疏は觀經の文義を解釋したものだからまづ初におき、他の四部は行儀を明かしたものだから後におくこの四部の中で五種正行の次第に準じて法事讚は阿彌陀を讀誦する行法であるから最初に之をおき、觀念法門は觀察等を明す故に次におき、往生禮讚は禮拜の儀式を明すゆへにその次におき、般舟讚は讚嘆の行を明す故に最後に

之をおくといふことが、三祖記主上人の法事讚私記上に明されてある。然しながら此は一應の分別で若し委しく論ずるならば、禮讚は身業禮拜口業讚嘆を明し、觀念法門は觀佛三昧と念佛三昧とを明し般舟讚は讚嘆を明かし法事讚は讚誦と讚嘆と供養とが明されてある。又この行儀分の中に唯だ正行のみが明されて、雜行の儀式が明されていないのは、此宗は正行を專にして雜行を斥ふからであるといふことが、三祖の禮讚私記に記されてある。今圖を以て示せば下の如し。



今この中に稱名正行を配當しない理由は、稱名念佛は四部何れにも共通するからである。

### 九 觀經疏に就て善導と諸師との意見の相違

觀經の疏釋に就て諸師と善導との間に大に意見の相違がある。この事は齋藤唯信氏の淨土教史の中にや、委しく述べられてあるが今その重要なもののみを抜抄して諸氏の參考に供したいと思ふ。

一、三分五分の異 淨影等の諸師は、觀經一部を序正流通の三分とした。所が善導は觀經一部を序分、正宗分、得益分流通分、耆闍會分の五分とした。

二、二緣七緣の異 淨影等は序分を禁父、禁母の二緣とした。然るに善導はそれを化前、禁父、禁母、厭苦、欣淨、散

善顯行、定善示觀の七緣とした。

三、定散配屬の異 諸師は十三觀をすべて定善とし三福を以て散善とした。然るに善導は前十三觀を定善とし後の三觀を散善とした。

四、定散致請の異 諸師は教我思惟は散善、教我正受は定善を請ふ意味にして定散共に韋提の致請を解釋した。然るに善導は教我思惟も教我正受も共に定善を請ふことと解釋して、定善の一門は韋提の致請であるが散善の一門は釋尊自ら開説し給ふたものであるとした。

五、一宗二宗の異 諸師は觀經は觀佛三昧爲宗とした。が善導は觀經一經の中に兩宗があること説き、釋迦教要門から云へば觀佛三昧爲宗であるが彌陀教弘願門所の方から言へば念佛三昧爲宗である。故に一經に兩宗があること解釋した。

六、一教二教の異 淨影等は、觀經は釋迦が彌陀の淨土の依正二報を觀するこゝを説かれた經であるとして、一尊一教を解釋した。然るに善導は釋迦は定散を説き、彌陀は弘願を顯はす故に二尊二教であるとした。

七、身土報應の異 諸師は彌陀は應身、極樂は應土であること善導は報身報土を解釋した。

八、九品凡聖の異 諸師は觀經の九品は凡聖に通ずと解釋した。その中淨影は、上々品は四五六地の菩薩、上中品は初二三地の菩薩、上下品は十住十行十廻向の菩薩、中三品は小乗の人、下三品は始覺大乘の人とした。然るに善導は九品みな凡夫を解釋した。

九、三心通局の異 諸師は三心は唯だ上三品に通ずれども、下六品には通ぜずとした。然るに善導は三心は上々品の經文にあるも、下八品に通ずるは勿論定善十三觀にも通ずと解釋した。

十、稱名の通不通の異 諸師は下三品の稱名は、唯下三品に限ることとした。然るに善導は經文には下三品に稱名を説くもその實上六品に通ずとした。

已上は極めて主要なるもののみを挙げたが、その外なほ多くの相違があるが、斯の如く善導が古今獨歩の才能を以つて觀經の真相を發揚し、彌陀教の眞意を發見して古今の誤謬を楷定せられたものが即ちこの五部九卷である。